

## 11. 1863 次調査報告

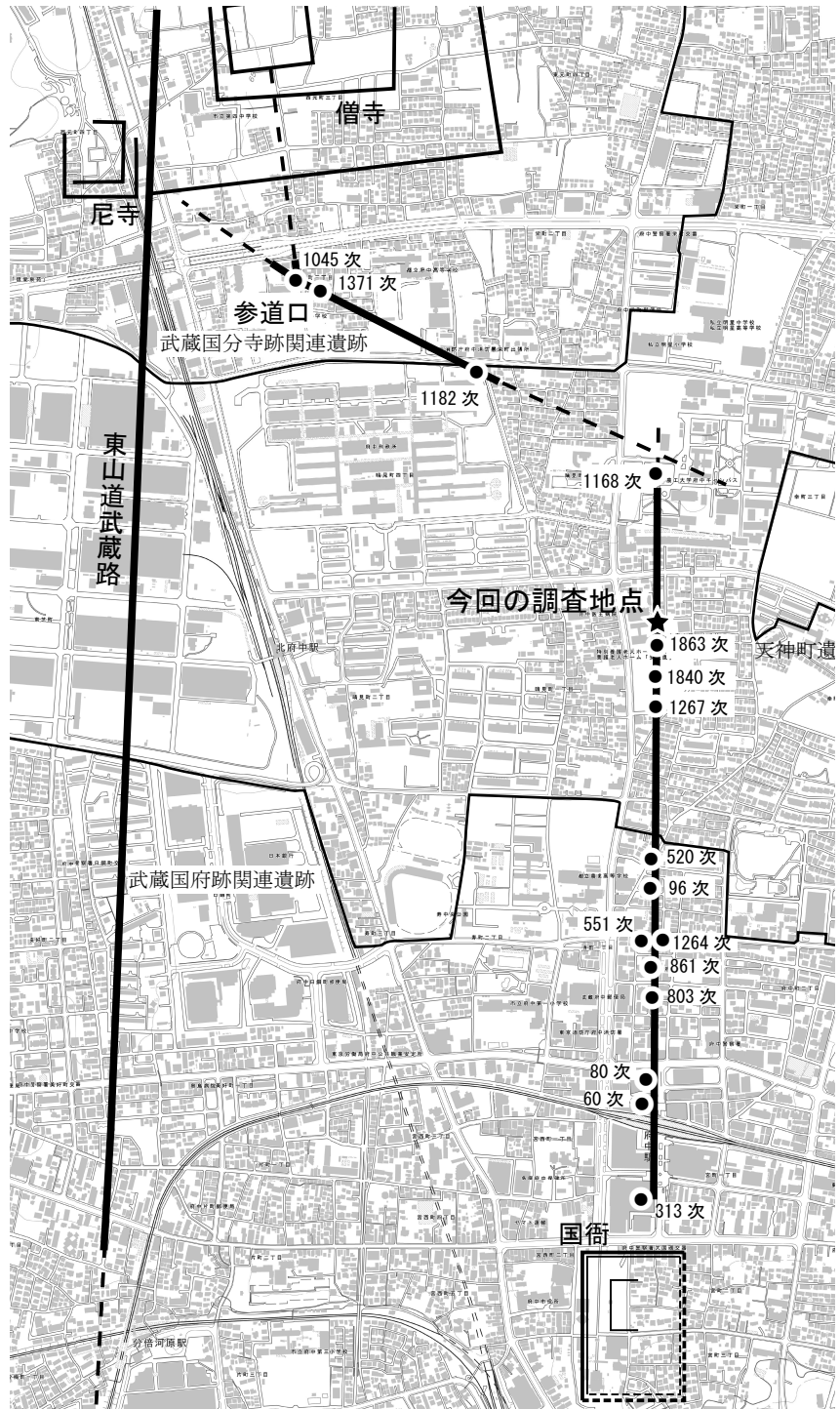
遺跡名	包蔵地外		
グリッド	E79-1次, E89-3次		
所在地	東京都府中市幸町1-22		
現地調査期間	令和2年8月28日～令和2年9月29日		
面積	34.2㎡	遺物出土量	コンテナ1箱
検出遺構	その他の遺構2基 (E79-SX1, E89-SX3) [縄文時代, 近世以降]		
調査担当者	野田憲一郎		
調査従事者	伊藤和人・伊藤朱・磯部ゆい((合) Taló)		

## 1 調査の概要

当調査地区は、京王線府中駅の北約820mの位置にあり、武蔵国府関連遺跡と武蔵国分寺跡関連遺跡のほぼ中間に位置する。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地外であるが、武蔵国衙から北へ向かう古代道路跡の延長線上に所在する。この古代道路跡は、武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡の参道口遺構から南東へ延びる道路跡と交差する可能性が想定され、古代の交通を知る上で重要な遺構といえる。

今回の調査は、府中第一中学校の校舎建替工事に伴い、既存校舎解体工事に伴う掘削範囲において当古代道路の推定ライン上に東西方向のトレンチを掘削し、その存在を確認することを目的とした。

これまで、府中第一中学校敷地内では、平成16年に古代道路の存否を確認する目的で確認調査(1267次調査)を実施しており、道路跡の可能性のある幅約2mの硬化面E89-SX1(以下SX1という)を検出している。また、令和元年度に実施した1840次調査(トレンチ1・2)では、幅1.6～1.8mの南北方向に延びる浅い溝状の遺構E89-SX2(以下S



第1863-1図 調査地区の位置と既調査区(古代道路関係)(1/15,000)

X 2 という) と硬化面が検出されている。トレンチ 2 で検出された S X 2 は、明確に道路跡と認定し難い遺構であるが、覆土上面に面的な締まりがあり道路跡の可能性を残している。また、トレンチ 1 で検出された硬化面 E 89 - S X 4 (以下 S X 4 という) は、S X 1・S X 2 を結んだ延長線上に位置することから、一連の道路跡である可能性が高い。

今回の調査は、中学校の校舎を挟んで北と南に長さ 15 m×幅 1 m のトレンチを 2 か所設定して実施した。北側をトレンチ 3、南側をトレンチ 4 として、舗装面等既存の障害物を撤去した後、重機を用いて掘削を開始した。遺構確認面の直上からは人力で調査し、遺構の検出作業にあたった。トレンチごとに写真撮影・図面等の記録を取り、調査完了後に埋め戻し・転圧を行い、掘削前の状態に復旧した。

## 2 土層堆積状況

今回調査したトレンチ 3・4 の地表面は、標高を約 58.5 m とする平坦な面にある。確認できた自然堆積層は概ね府中Ⅲ層(褐色土層)からⅣ層(ローム漸移層)であり、古代の土層とされるⅡ層(暗褐色土・黒色土層)はトレンチ 3 の東側に一部残るのみで、ほぼ失われていた。土層は全体的に非常に硬く締まり、近現代の造成工事により攪乱・転圧された範囲が大きかった。

### (1) トレンチ 3

- 表土層 アスファルト、砕石、灰褐色土を主体とした盛土 (G L - 56cm)
- 府中Ⅲ層 黒褐色土 緻密で強く締まる (G L - 56cm ~ 62cm, 層厚 6 cm) 遺構確認面
- 府中Ⅳ層 褐色土 (ローム漸移層, G L - 62cm ~ 74cm, 層厚 12cm)
- 府中Ⅴ層 黄褐色土 (ソフトローム層 G L - 74cm ~ 95cm 以上)

### (2) トレンチ 4

- 表土層 アスファルト、砕石、灰褐色土を主体とした盛土 (G L - 50c ~ 86cm)
- 府中Ⅱ層 暗褐色土 粒子粗くぼそぼそしている (G L - 50 ~ 59cm, 9 cm)
- 府中Ⅲ層 黒褐色土 緻密で強く締まる (G L - 59 ~ 90cm, 層厚 31cm) 遺構確認面
- 府中Ⅳ層 褐色土 (ローム漸移層, G L - 90 ~ 100cm, 層厚 10cm)
- 府中Ⅴ層 黄褐色土 (ソフトローム, G L - 100cm 以下)

## 3 確認された遺構と遺物

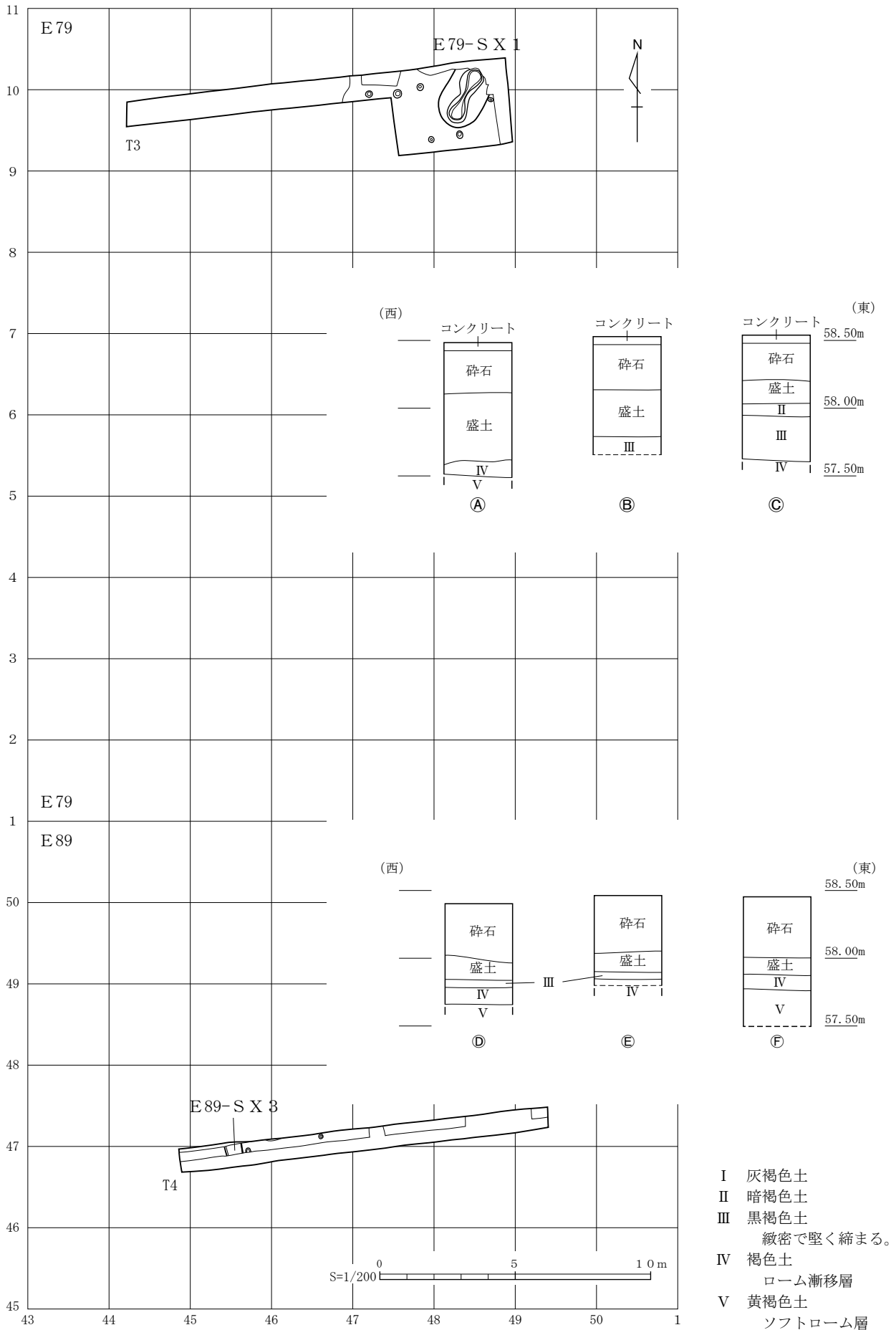
### (1) 遺構

E 79 - S X 1 トレンチ 3 で検出された。開口部は南北に長い楕円形を呈し、北側上場を攪乱されている。確認面での規模は、長軸 2.33 m 以上×短軸 1.6 m×深さ 1.58 m であった。覆土は縄文時代の遺物包含層である府中Ⅲ層相当の黒褐色土が主体であることから、縄文時代の所産と推定され、その形状から狩猟用の落とし穴とされる遺構といえる。広く開いた開口部から下へ向かって狭く窄まっていき、断面形が漏斗状を呈する所謂 T ピットの形を呈している。特徴的なのは、中段下方の狭窄部の平面形が瓢型に縊れていることである。最狭部である中央部の幅は 10 cm に満たない。遺物は出土しなかった。

E 89 - S X 3 トレンチ 4 で検出された。南北方向に長く構築されているものと推定され、断面形は箱状を呈する。覆土の状態から近世以降の耕作に伴う遺構であると考えられる。

小穴 トレンチ 3 で 6 基のピットを検出した。覆土は濃褐色土を主体としており、縄文時代の所産であると考えられる。遺物は出土しなかった。

トレンチ 4 からは、2 基のピットを検出した。覆土は暗褐色土を呈しており、古代～中世の所



第 1863-2 図 トレンチ位置図・柱状模式図

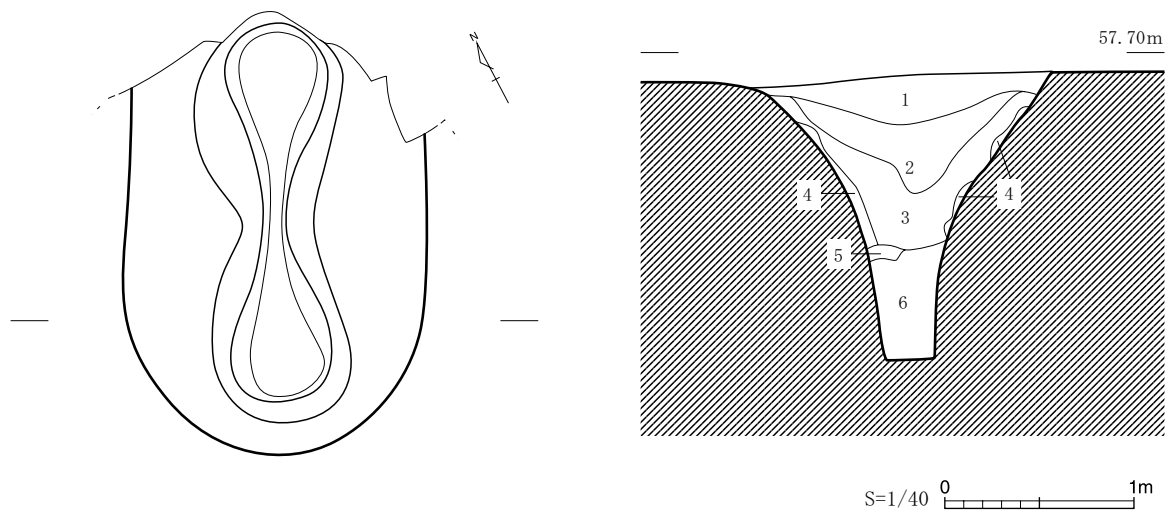
産と考えられる。遺物は出土しなかった。

(2) 表土中から出土した遺物

トレンチ 4 の表土中から土師器小片が出土した。小片のため図化には至らなかった。

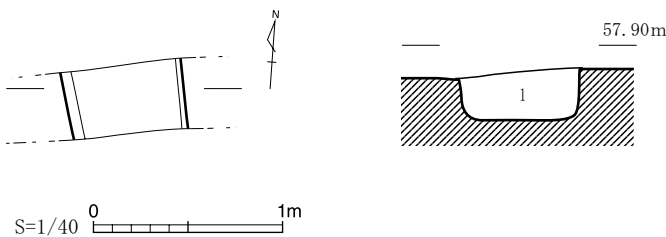
4 まとめ

今回の確認調査は、武蔵国衙より北方向に延びると推定されている、武蔵国府・国分寺連絡路（以下、連絡路とする）の延長線上において、延伸する道路跡の存否を確認する目的で、周知の埋蔵文化財包蔵地外ではあるが、府中第一中学校の既存校舎周りで確認調査をおこなったものである。府中第一中学校敷地内の調査は前述の通り、平成 16 年実施の 1267 次調査（『概報 39』）で確認された硬化面（E 89- S X 1）と令和元年度実施の 1840 次調査で確認された溝状遺構（E 89- S X 2）及び硬化面（E 89- S X 4）が確認されている。南端の E 89- S X 1 から北端の E 89- S X 4 までの距離は約 105 m 離れており、これらが繋がり、連絡路の一部と断定することは難しい。このラインの振れ角は、E 89- S X 1 が府中市 E 89 グリッドの X = 47・48 グリッド内に、E 89- S X 2 が X = 46・47 グリッド内に、E 89- S X 4 が X = 45 グリッド内で検出されており、105 m の間で西に約 8° 偏している。この推定ラインを今回の調査地区であるトレンチ 3 とトレ



E79-S X 1 土層説明

1. 黒褐色土 橙色スコリア微量含む。締まり強。
2. 黒褐色土 橙色スコリア多量含む。締まり強。
3. 黒褐色土 橙色スコリア・ローム粒多量含む。締まり強。
4. 黄褐色土 黒褐色土が斑に混ざる。締まり強。
5. 明褐色土 ロームブロック。締まり強。
6. 黄褐色土と黒褐色土の混合 橙色スコリア・黒色土粒多量含む。締まり強。



E79-S X 3 土層説明

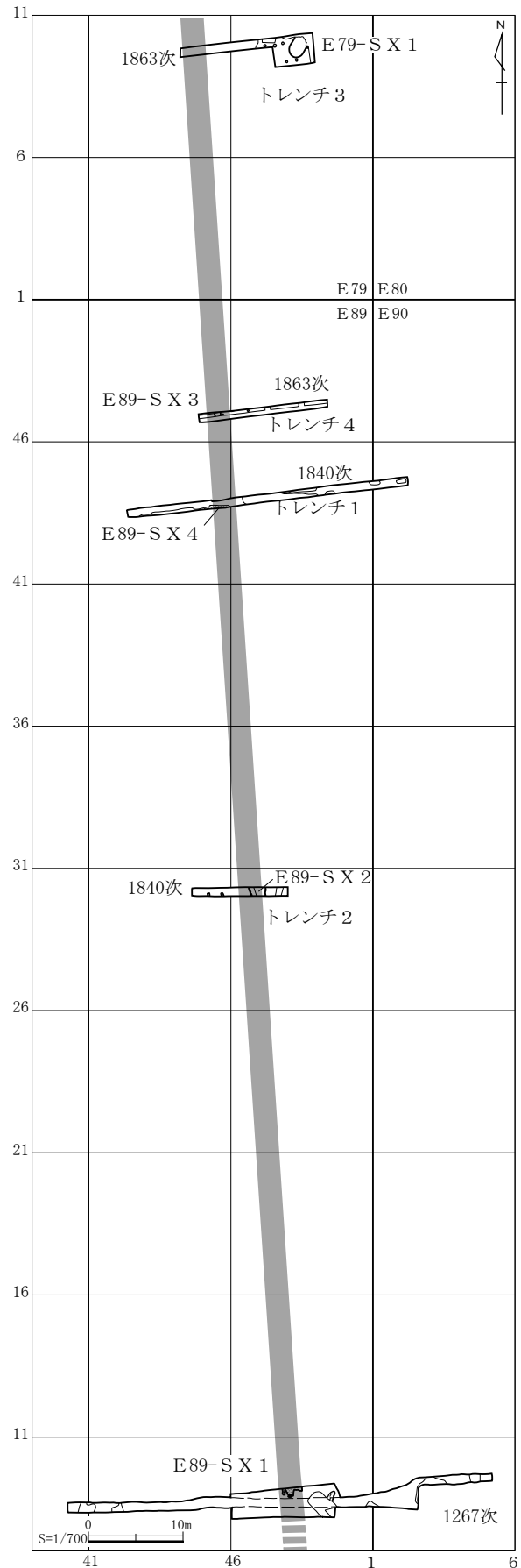
1. 灰褐色土 ローム粒多量含む。締まりやや強。

遺構No.	グリッド	平面形・規模 (cm)	備考
S X 1	E 79(48, 9・10)	楕円形, 長軸 233 以上×短軸 160 ×深さ 158	攪乱に切られる。
S X 3	E 89(45, 46・47)	不明, 長軸 36 以上×短軸 62 ×深さ 28	攪乱に切られる。

第 1863-3 図 E 79- S X 1 (上段)・E 79- S X 3 (下段) 平面図・断面図

ンチ4の位置まで延伸すると、トレンチ4ではX = 45グリッド内に、トレンチ3ではX = 44グリッド内に道路跡に相当する遺構が検出される想定となるが、調査の結果、遺構は検出されなかった。おそらく、トレンチ3・4とも近現代の造成による削平や学校整備の造作等により攪乱されている部分が多く、E 89- S X 1やE 89- S X 4のようにⅢ層上面が堅く締まった掘り込みをもたない硬化面は、削平されてしまった可能性が考えられる。浅い溝状の掘り込みを持つE 89- S X 2は、Ⅲ層を掘り込んでいるため、Ⅲ層が残存していれば検出されるはずであるが、同様の遺構は検出されていないことから、E 89- S X 2は連絡路の一部ではなく単独の遺構である可能性が高い。今回の確認調査の結果、当学校敷地内においては後世の削平や攪乱により連絡路が構築されたであろう層位の多くが損なわれており、連絡路の確認調査については、今後の学校敷地外での追加調査に期待したい。

当確認調査において偶然、縄文時代の落とし穴が1基発見された。この落とし穴は、所謂Tピットで、狭窄部は瓢型に縊れる特徴をもつ。開口部の規模は長軸2.33 m以上、短軸1.6m、深さが1.58 mに及ぶため、鹿や猪など偶蹄類の獣を捕獲するための罠であろう。学校敷地内での調査面積は合計で142 m<sup>2</sup>の範囲を遺構検出したが、落とし穴はこの1基のみであり、単独の遺構であると推測される。当地区の周辺に獣類が集まるような谷状凹地や水場は今のところ発見されていないため、土地環境と落とし穴との因果関係は詳らかにしえないが、狩猟・採集を生業とする縄文人の行動範囲が、当調査地区にまでおよんでいたことを示す、新たな資料が追加されたといえよう。



第 1863-4 図 連絡路推定図



第 1863-5 図  
トレンチ 3 全景（東）



第 1863-6 図  
トレンチ 3 東側全景（東）



第 1863-7 図  
トレンチ 4 全景（東）



第 1863-8 図  
E 79 - S X 1 全景 (北東)



第 1863-9 図  
E 79 - S X 1 断面 (北)



第 1863-10 図  
E 89 - S X 3 全景 (南)